

私の学生時代4

教養部の非常勤講師，および大学紛争

三木 良一

昭和25年（1950年）学部卒

今回は、三木良一氏に大学紛争時を中心に関連する思い出を語っていただいた。編集委員の井川が聞き手となって伺ったものを録音し、テープ起こしの後三木氏に手を加えてもらった。Iと付いているのは井川の質問であり、Mと付いている部分は三木氏のお話である。年譜などは会談の後に井川が作成したものである。

1. 非常勤講師として宇治分校で教える

I これまで同窓会誌（含む同窓会準備号など）に3回に亘り、先生の第三高等学校、京都大学理学部および大学院における学生生活をお書きいただきました。

第3回目の記事の中に、当時の三木先生を含めた大学院生たちの写真がありますが、全員が背広を着て、ネクタイを絞めております。その雰囲気は現在の大学院生とは全く異なり、既に一人前の立派な教員・研究者であったことを示しております。その頃から既に70年近く経過しましたが、大学および大学院の社会的地位が大きく変化してきたことが、この写真一枚からも覗える感です。

この前の記事で、先生が立命館大学工学部数学物理学科に就職されたことが記されており、先生の学生時代は終わった訳ですが、学生時代が終わっても、数学教室との関係が終わる訳がないのは当然です。その後の関係についてお話いただければと思います。

M その前に基本的事項について復習しておきたいことが有ります。意外に忘れやすいもので、宇治分校が出来て、講義が行われたのが何年から何年までであるかなのです。

I 宇治分校の沿革についてですね、それは調べれば解ります。

教養部設置および廃止、宇治分校の沿革

1947年（昭和22年）10月	京都帝国大学を京都大学と改称
1949年（昭和24年）5月	新制大学が設置される。 第三高等学校は京都大学の所轄となる
1949年（昭和24年）8月	教養課程の講義を目的に分校を設置
1950年（昭和25年）3月	第三高等学校を京都大学に統合
1950年（昭和25年）5月	宇治分校開設、教養課程の一部（一回生）を行う
1950年（昭和25年）5月	第三高等学校を廃止
1953年（昭和28年）4月	新制大学院設置
1954年（昭和29年）3月	教養部規定を制定し、分校を教養部と改称（学内処置）
1961年（昭和36年）4月	教養課程一回生の授業も吉田で行う
1961年（昭和36年）5月	宇治分校廃止
1963年（昭和38年）4月	文部省令により正式に教養部を設置
1993年（平成5年）3月	教養部廃止

M 森毅君の教養部への就任は何時かわかりますか、

I これも調べればわかるでしょう。

森毅の京都大学教養部助教授への就任は、1957年（昭和32年）である。

新制大学が発足して、教養教育を行うことが大学に課せられたが、京都大学ではその教養教育全体を旧第三高等学校の施設で行うことが出来なかった。そのため、旧陸軍火薬廠跡地の一部が京都大学に移管されていたので、そこに宇治分校を開設し、宇治分校では1回生対象の授業を、吉田の旧第三高等学校の施設で2回生の授業を行った。従って、常勤、非常勤の区別無く、1回生の授業をする日は宇治へ、2回生の授業をする日は吉田へ行くこととなる訳であった。

1961年春には、吉田に新しい建物が出来、教養部の授業を全て吉田で行えるようになり、宇治分校は廃止された。

M 私は1960年9月、Boursier（フランス政府給費留学生）でフランスへ行くまで宇治分校で非常勤をやりました（最初がどの年度かは不明。1955年より早くはない）。覚えているのは、非常勤の者は講義がある日には、9時の講義に間に合うような時間に教養部の正門に集まりました。そこからバスで宇治分校まで連れて行かれました。その集合に遅れると、教養棟の会計課へ行って京阪電車の回数券を貰うんです。黄檗まで行ってあとは歩いてですね。（当時、京阪電車の京阪本線の終点が三条であり、京阪電車に乗るためには、正門から京阪三条まで市電を使うなりして自分で行かねばならなかった）

私は、「今日は吉田へ行く日、今日は宇治へ行く日」などと考えていた形跡は無いので、多分私が頼まれていたのは1回生対象の授業であったのかと思います。弁当を持っていったということも覚えていませんから、午前中に授業を2コマ持っていたと思います。

一つ話して置きたいのは、そのバスには文学部の大物教授とかいろんな人が乗っていたのですが、森毅君は変なことをいだしまして、「このバスがもし事故を起こして、我々スタッフが怪我をした場合は、どうしてくれるんや？」すると「それは公務傷害に当たるから、心配するな」という話だった。当時は道路事情の悪い時代ですから、結構時間が掛かりました。七条大橋のあたりを疎水に沿ってズット下がっていったのは覚えています。多分竹田街道ではなかったかと思っています。

当時、自動車を運転できる人が自分で自動車で宇治分校へ行くのを禁じられていたかどうか、それは分かりません。それを云うのは、直接的にはこの話と関係ないのですが、高槻に公務員宿舎があって、そこから大学までの通勤バスがあったのです。ある朝、普段は別の交通手段を使っていた方が、たまたまバスが居たものだからそのバスに乗せてもらった。ところがそのとき事故が起こって死にはしなかったが、重傷を負うということがあった。しかし、届けている通勤手段ではないから、怪我の保障は出来ないということになったのです。公務員宿舎ですから、宿舎を出たときから公務は出発してますから。そんなことが有ったせいで森毅君はそんなことを言い出したのです。もしも事故が起こると深刻な問題になります。

Boursier（フランス政府給費留学生）でフランスへ行くまでやりましたが、私のフランスへの出発が1960年9月です。余談になりますが、この1960年9月出発のフランスへの船旅について忘れられない思い出があります。出発前に、樺美智子さんが60年安保闘争のデモの中で死亡する事件が起こりました。フランスへの航海の途中で浅沼稲次郎暗殺事件を知りました（1960年10月日比谷公会堂で演説中に日本社会党委員長浅沼が暗殺された。選挙を前にして各党首が揃っての演説会であり、テレビ中継されていた。従って暗殺の様子も日本中に同時中継された訳である）。マルセイユに到着後に受け取った家族からの手紙で数学科同級生大塚文三君の死を知りました。この3人の方々の死は、それぞれに私にとっては忘れることの出来ない出来事でしたが、それらが日本からフランスへの船旅の前に、途中で、到着して知ることになったのも、印象深いことでした。

京大教養部非常勤講師を1959年度で止めたのか、夏休みまでやってその後を誰かに引き継いでもらったのか、記憶がはっきりはしません。Boursierに合格してから余り慌てなかったように思います。行ったのは何しろ9月ですからね。それは西田俊夫君がアメリカへ行った年なのです。

先に記した大塚文三君が中心となって、2人の送別会をやってくれたのです。そうであるのに、フランスへ着いて家からの手紙で大塚君の死を知らされたのです。

1949年に新制大学が設置されると共に、教養教育が始まった。それと同時に宇治分校が設置された。宇治分校では1回生の授業を行い、吉田の旧三高の施設で2回生の授業を行った。その後吉田に新しい建物（D号館）が建てられて、1961年春からは吉田で1回生と2回生の授業の全部を出来るようになった。これを機に、宇治分校は廃止された。

2. 大学紛争

M 京都大学の紛争はいつから始まったのですか。

I 私が少し書き取ってきたものがこの紙にあります。

京大紛争年表（含む東大闘争）主として西山伸文学部文書館研究紀要（2012年）より

1968年	1月29日	東大医学部でインターン制度が問題となる。
	3月28日	東大の卒業式が中止
	6月15日	東大医学部全共闘が安田講堂を占拠
	6月17日	機動隊を導入して安田講堂の封鎖解除
	7月2日	日本の新左翼約250人が安田講堂をバリケード封鎖
	7月5日	東大教養学部無期限スト
1969年	1月20日	東大が1969年度入学試験中止を発表

以下京大

1969年	1月16日	寮闘争に関連して学生部封鎖
	1月	理学部数学科無期限ストに突入
	1月22日	学生部の封鎖解除（機動隊を入れずに）
	1月30日	教養部無期限スト決議
	1月31日	教養部正門にバリケード

2月14日	法経第一教室で教養部代議員大会が予定されていたが、早朝に乱闘がおこり250余名が負傷
3月	京大では入試を学外の施設を用いて実施 (この年、東大は入試中止)
9月17日	時計台封鎖
9月22日	機動隊を導入して封鎖解除
10月1日	教養部授業再開
10月	理学部数学科無期限スト解除
1970年 3月	入試を学内で実施

2.1 1969年度の立命館大学の入学試験

M わだつみ像の破壊事件がありました（日本戦没学生記念会が戦没学生を記念するブロンズ像を作成して東京大学に寄贈しようとしたが拒否された。末川博氏が学長であった立命館大学がこの像を受け入れて広小路キャンパスに建てた。反戦の象徴の一つと見られてきたこの像を、1969年に全共闘の学生が破壊した事件。立命館大学広小路キャンパスは、府立医大病院の河原町通りを挟んだ西側にあった。現在の府立医科大学図書館や府立医大広小路キャンパスとなっているところである）。

立命館大学の入学試験が間近にせまったころ、広小路キャンパスの中川会館が学生たちによって封鎖されました。

さらに例年使用してきた学外の試験場が、突然に使用できなくなる事態になりました。仕方が無いので、臨時に試験会場の設営をしなければならぬ事態に至りました。そのため衣笠に新しく出来た体育館を試験会場に使うことになりました。4月から使う予定になってはいたが、まだ授業で一度も使ったことの無い体育館を入試に使うのは何事か、と体育会系の「校友会」が非常に強い苦情を寄せてきました。とは云え新体育館を使わないと入試ができないのですから、教職員総動員で体育館に机と椅子をならべ、床を傷付けないように上履きを用意しました。

入学入試が無事に終わって、先生方ももう帰って宜しいということになり、帰りかけると帰る受験生の列と同じになったので、受験生が今回の試験にどんな印象を持っているかを知ろうと思って密かに耳をそばだてたら、このような形で実施された入学試験に批判めいた意見も聞こえてきました。

入学試験の採点場は衣笠キャンパスの一番西の端の部屋となりました。それは、セクトが採点を妨害しようと押しかけてくるとすれば、衣笠キャンパスにおいては可能なルートは東からなのです。したがってセクトが押し掛けてくると、東で見張っている者が、採点場の責任者にすぐさま電話連絡すると、責任者は採点場にいる者達を指揮して答案用紙を持って逃げて、安全な場所へ確実に移すようにとの指令が出されていたのです。そのために試験場に答案用紙を入れるためのダンボール箱や運び出すための台車などが準備されておりました。笑うに笑えないような話ですが、そのときは皆が必死でどうするかを考えたのです。

私立大学では、入試が出来なければ破産すると言われておりましたから、なんとも厳しい入試でした。しかしこんな大変な入試はその年だけで済みました。

2.2 京大教養部の中に入る

I 京大教養部が封鎖された1968年度から1969年度にかけての頃、先生は京大で非常勤で教えておられましたか。

M 何時だったか思い出せませんが、とにかく契約して教えていました。その年に京大に入学した方はどんな方々ですか。

I 東大の入試のない年に入学したのは、数学関係では森重文さんや河野明さんなどです。

M 私は河野明さんを教えたのは覚えております。河野さんのいたクラスでクラス討論に加わったかどうかは今でははっきりとは思い出せません。貴方はご存知無いと思うのですが、立命館大学の総長までやられた細野さんと言う先生の息子さんがそのとき京大の数理工学に入っているのです。



教養部封鎖時の正門

非常勤の者達は門でシャッターアウトでした。京大を封鎖しているセクトと立命を封鎖しているセクトとは微妙に違ったのです。森毅君や小針君などがやったのですが、自主ゼミと称して建物の中へ入ってクラス討論に加わる、ということをおもやりました。私などは、立命館闘争への影響を探る意味も有ったのです。セクトは「クラス討論に加わるのなら入れてやる」と私に門を通らせるのです。クラスに入って「これからクラス討論をする」というと、当然それに反対するやつもいる訳です。「先生が来ているではないか」と言うわけです。

森毅君もそうだったのでしょうが、紛争解決に役立つことは何か無いとか、わざと喧嘩を吹っかけたことがあります。たとえば、あのころは「〇〇にとって、△△とは何

か」という言い回しがはやっていたのです。「君らは偉そうに何か闘争や何やと云っているが、いずれ4年間もこれをやらないだろう。4年も経って収まって、たとえ5年かかっても卒業してしまえば、君らは京大卒業でございといって、就職したら権力側にたった仕事をするんやろ、そのへん自分の節操と言うものはどうなっているのだろう、その時の君らの姿を見たい」などといいました。すると「そこまではよう考えていない」「そういうことを議論する段階にはまだなっていない」などといっていました。息子さんからそんな様子を聞いたのでしょう、細野さんからは「君、何か勇ましいことをいうたそうやな」といわれました。

自主ゼミならいいのだろうというので、内容的に進んだ数学の話などをしました。

ここで思い起こされるのは、小針君が“停価闘争”と言うのをやっていたことです。ドイツ語の池田と言う先生などと相談して停価闘争というのをやったか、やろうとした。学生たちの気持ちを汲んで教師の側が成績の評価をしないという運動をした。

小針さんは評論家でいることが出来なかったのでしょう。紛争の中で、真面目に動き、体も心も揉みくちゃになって、段々と衰えて行かざるを得なかったのだろうと思わずには居られません。余りに当事者で有りすぎたと言えるのではないのでしょうか。

同窓会創刊号の松本さんの記事にも、同じ号の上田さんの話にも出ている。小針さんの著書「確率論」に広中平祐さんが文章を寄せているが、そこに書き記された紛争の中で揉みくちゃになってすっかり衰えてしまった小針さんの姿には心打たれるものがある。

M 小針君は家の階段から落ちて大怪我をし、生死の境を彷徨っている時に彼を病院に見舞ったことがある。私もいま尚、彼の死には耐えられない思いをもっている。とは言っても、私はやっぱり京大紛争の当事者ではないのです。

先にも触れましたが、吉田二本松の教養部キャンパスの中に入るのに、「クラス討論に行く」といえば、すっと入れてくれました。「授業はしませんか」ときかれると「しいへん、しいへん」いうて通りました。数理工学のクラスなどに入り、討論に参加しました。闘争に関心の無い学生はここには来ておらず、来ていた学生は真面目でした。「彼らの言うことは解る面があるが、彼らの行動には賛成しかねる」と言う学生が多かったです。

2.3 立命館大学の紛争

M 立命館大学は入試の問題と卒業試験をどうするかとの問題を同時に抱え込んだのです。1月に封鎖が始まりましたから。

「新聞社事件」というのが起こって、それが京大へ飛び火して波及したのでしょう。立命館大学の学生部長などといった主要メンバーが中川会館の中に閉じ込められているのです。封鎖学生に捕まえられて、それは学生部長などは「封鎖を解け」などといいいに行っただけでそのまま捕まったのです。

わだつみ像が破壊されたのもその頃だし、立命館大学の広小路の北側に清浄華院というお寺があり、その屋上から墓石を立命の校地に向けて投げ込んできました。

教員側は衣笠で会議をやるというまどろっこしいことはやって居れなくて、広小路で緊急会議をやったのです。

封鎖の学生側が、クラス討議に各学部の代表者を遣せ、というので学部長などは全部広小路におった。我々は教授会などを広小路で開くことになりましたが、そうすると教授それぞれが学生から個別交渉を求めらる等の厳しい状況になりました。

卒業試験は全部レポートにするということになりました。すでに就職が決まっている学生もいましたから、雇う側も、紛争を持ち込むのではないかと心配もあったでしょうが、採用の時に慎重にやっていたのでしょう、雇ってはくれました。セクトは逆に就職しようとはしなかった。

入試の時期は各大学で違いますから、京大は予備校、高校、他大学および仮設のプレハブ試験場などの学外施設を用いて入試を実行できて、採点は市内の某所ということでした。どうもどこかの銀行の部屋を借りたようです。京大を出たバスが、市内某所へ行ったとのこと。彼らはよく言っていました「市内の某所へ行く」と。

立命も紛争の時は色々有りました。学生部の先生が閉じ込められたりしましたが、漢字の研究で文化勲章を貰われた白川静先生は、夜中中自分の研究室で研究を続けておられたという話があります。学生も白川先生には敬意を表して、研究室をノックしなかったという逸話があります。また、白川先生に「この研究が終わるまで暫く待て」と言われて、学生が「はい！」と言ったという話も有ります。その様なことが出来たのは日本中で白川先生一人ではないかと、噂したものです。北山先生も危害は加えられなかったけれども、退去させられたのかな、白川先生は「今途中じゃ!」と言ったとか、一字解析するのに随分と時間を要するようでした。

日本史の奈良本辰也、林屋辰三郎、北山茂夫の三先生が立命館大学を去っていかれたのも、紛争が収まったあとでした。なかでも北山先生には、以前から特に色々有益なお話を頂いていましたので、後にシンポジュームの機会か何かに伊豆のお仕事部屋をお訪ねしたことがあります。

白川さんは肝の据わった人だったようです。と言うよりも学生も白川さんにはどうすることも出来なかったのでしょう。

この頃、もちろんこれは冗談でしょうが、「立命が潰れると俺はラーメンの屋台を引

いて商売をする。そのためにこれからラーメンの作り方を学ぶ」と言う先生もいました。冗談だとしてもこんな話が出てくるような状況の中にいたのです。つまり、身の振り方を考えておかなければならない、との思いがありました。

私達“若手”は、宿直と称して、実験室の床に敷物を敷いてねながら、セクトの侵入に備えたものです。

私学の場合は大学が潰れるかどうかを考えながらやらざるを得ないし、紛争が終わった後を見定めた行動をしなければならぬ。尻を捲^{けつ}って大学を辞める訳にはいかない、自分達の大学を潰す訳には行かないとの思いは切実に有りました。

2.4 京大数学教室の闘争について

M ところで、京大理学部数学科の先生方が学生と夜遅くまで議論させられたのは、何年ですか、教養部封鎖と重なっているのかな。

理学部数学教室が封鎖されていたのかどうか知りませんが、我々が土曜日にやるゼミは出来ていたように記憶しております。その時には先生方が「あいつらはけしからん」とだけはいわれませんでした。ある意味で、「彼らの議論の論拠がイイカゲンではないということは見直した。やり方は良いとはいわないが、4回生ともなればそれなりの筋の通った話をしている。それにある程度ルールは守られている」と言っておられました。誰をさして言っておられたかは知りませんが、そのことは印象に残っています。

私が教養部で学生に議論を吹っかけた時の状況や、立命館大学の状況などとは大分違うのだな、と私は思いました。

余談ですが、一代前の松本敏三、蟹谷乗養先生の時代だったらどうなったか知りませんが。いつか申しましたが、山口先生に唆されて「同明会」の復活の大会をやるうとして部屋を借りにいったら、蟹谷先生にそれだけでこっぴどく叱られました。その時とはだいぶちがうな、と思ったことでした。

I 一つは大学の社会の中の位置が変わっていますね。

M 京大理学部数学科で、先生側の対応の中心は吉沢尚明先生でしたが、森毅君は私に「吉沢さんのやり方は、友好的やり方だ」と言っていたのを覚えています。

I ああいう時に、学生と対応できる人は余り多くはないでしょう。

M 学生にやられっぱなしでも良くないし、頭から叱りつけるやり方でも良くない。話は聴くけれども、その中で君達の言ったところで、この部分はおかしい、と言えなければならぬ。

I 紛争を通して、京大理学部の場合、制度が革新的にかわった。学科制を廃止するとか、大幅な変更がありました。

学生側の4年生で先生側とやりあった中心は松本和一郎君です。この学年は闘争を一生懸命にやりもしましたが、後に学者として偉くなった人も沢山でた学年でした。この辺の経緯は、同窓会誌に連載されている松本君の記事に詳しく記されています。

あの時代は、新しいことを求めて一生懸命に動いた面と、訳がわからずにメチャクチャやった面とが混在しておりましたね。

M それと共に、物理的な破壊行動に酔い痴れたところもありました。
その後、理学部はどうなって行ったのしょう。

I それは松本君のこの同窓会誌2号に載る文章に詳しく書かれています。学生大会を開いて無期限ストをといて、正常化に向って動いていきます。1969年の暮れ位に正常化に動いていきます。

M 京大理学部でそれだけの改革を実現できたとするならば、もってよしとするか、と言うことですね。

I 紛争に真面目に向かい合って、学生の主張する所を、全部ではないのは当然だが、汲み上げて学部の制度を大きく変えたことは、他のところでは余り見られないのではないかと思います。

M 最後に、これまで話した事柄は、約50年前の事ですので、不正確な部分があって、それがどなたかを傷つけることを恐れております。その場合にはお赦しを頂きたく存じます。

I 大学紛争から既に随分と時間が経ち、当時と比べても大学の社会での地位が変わってきています。学生として大学問題に取り組んだ松本和一郎さんすら、定年を迎えて退職されています。その松本さんから当時の詳しい様子を伺えるのも貴重なことですが、三木先生のように教員側から、大学紛争に当たられた経験を聞かせて頂けたことは真に貴重なこととしか言い様がありません。

4回に亘るご執筆およびお話くださいましたこと心からお礼申し上げます。

(完)